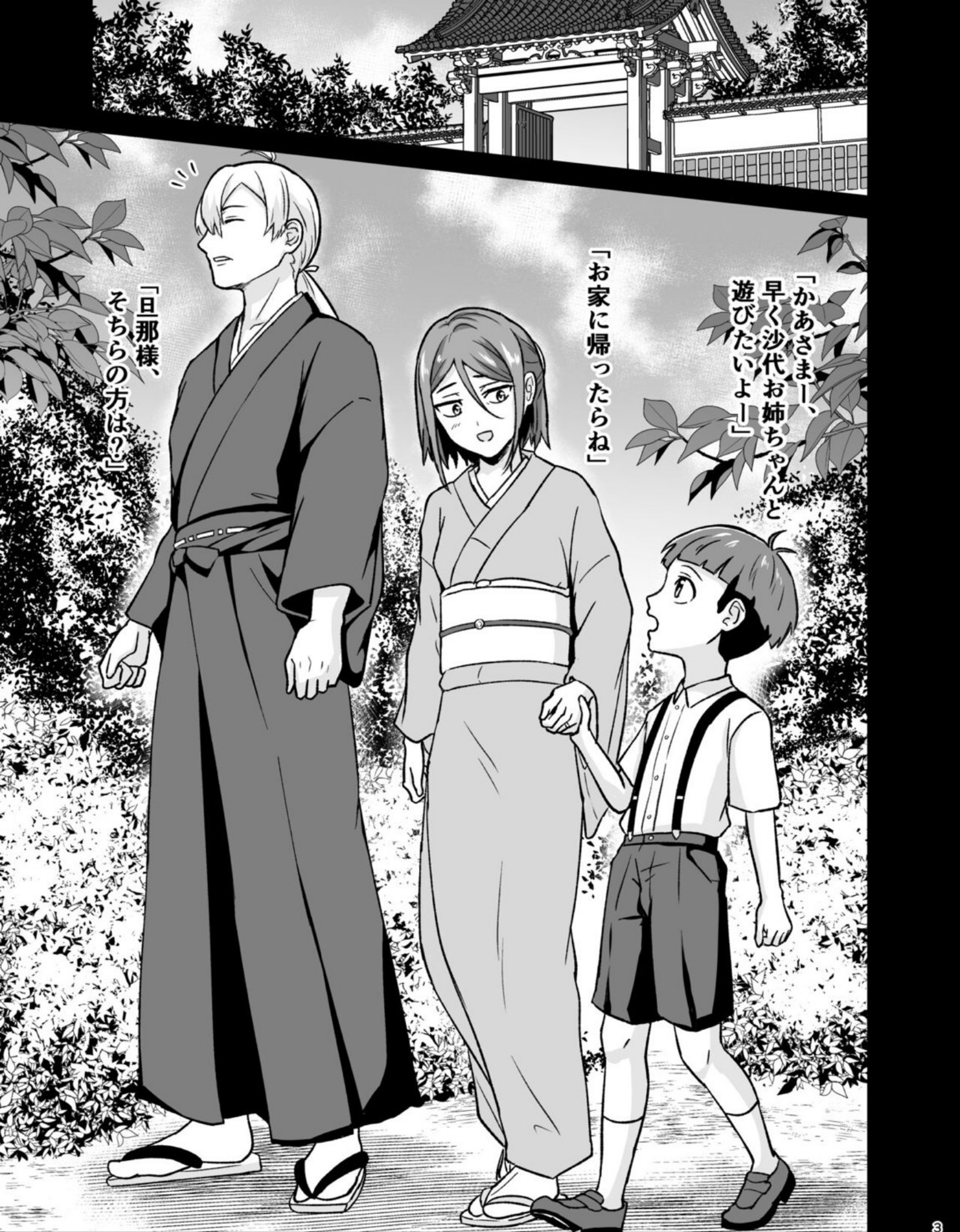


愛し恋人のいない夜

成人向





「旦那様、  
そちらの方は？」

「お家に帰ったらね」

「かあさまー、  
早く沙代お姉ちゃんと  
遊びたいよー」

「ああ、彼は会社の取引で  
世話になっている子だよ」

「帰りの列車が無くて  
一晩泊まるから  
寝床を用意して  
やってくれ  
くれぐれも  
失礼の無いようにな」

身体が大きくて  
怖い雰囲気の人…

あまり  
関わりたくないわ…



「まったく、また突然  
東京のモンを  
村に入れるなんて  
迷惑したらないよ」

「庚子、あなたのとこの  
部屋を貸してやりなさい」

「えっ…ですが  
お姉様…」

クキッ  
クキッ



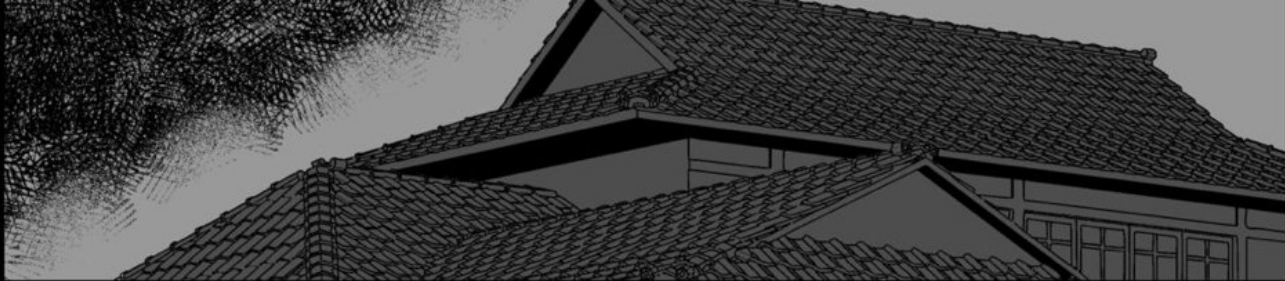
(克典さんの  
お客人なのに…)

(私が三女だからって…  
いつも私ばかり  
いいように使われる)



「余所者を龍賀の屋敷に  
長々と居させるわけには  
いきませんから。  
分かるでしょう長田？」

クキッ



「久々に幽霊族が現れたそうです。何でも、血を大量に精製出来る見込みのある大物だとか」

「幽霊族はすべて狩りつくしたと  
思っていました  
が、一体どこに潜んでいたのでしょうか」



「とはいえ裏鬼道の勤めとして出ないわけには参りません」

「大丈夫なるべく早く帰りますよ」



「でも…こんな夜中に東京からのお客人がいる時に私と時弥だけでは……」

深夜



それならあえて  
離れの厠を  
案内しようかしら



カッパ

「どういうおつもりですか!？」

「さささささ」

「幽霊族と妖怪を見紛う罫を仕掛けておいてよかったです」

カッパ

カッパ

「あの強そうな旦那のいない隙にこの熟れた身体を独り占め出来る！」

「嫌あつ!」  
「だ、だれか!」  
「助け……!」

「おっと、騒いだらどうなるかわかるよな?」  
「俺に従わないと……お前ら龍賀一族の秘密をバラす!」  
「……!」

カッパ





「キスの次は  
フェラな？」

「う……」  
（私の顔ぐらいある…  
こんなのを  
相手にしないと  
いけないの…!?)

「ほらっデカチンポだぞ  
ツツイの時貞より  
デカくて太くて  
硬いんじゃないか？」

「ポーっとしてねえでさ、  
父親にやってたのと  
同じように  
射精するまでシャブれよ」

吐き気が  
するほど  
嫌だけど…

逆らえない以上  
一度射精させて

満足させて  
終わらせる  
しかない…

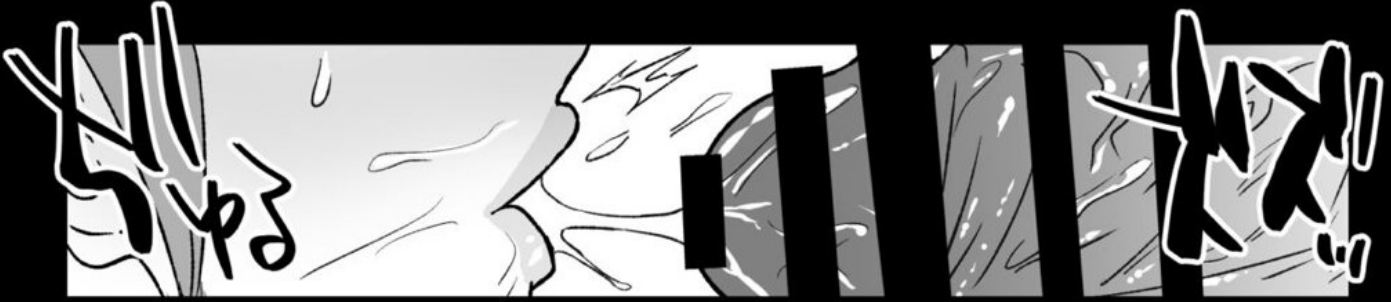
「んっ♡ちゅぽっ♡  
ちゅっぽ♡ちゅぶっ♡  
ちゅるるっ♡ぐっ♡  
んぶっ♡おぶっ♡ちゅ♡」

「ほお、大人しそうな顔をして  
下品なフェラするじゃねえか！  
流石、長らく父親の肉便器を  
やっていただけある♪  
だかもつと喉奥を使ってだな…」



(や、やっぱり、知らない男の精液を全部飲むなんて、無理……!)

「オラッ!!  
喉マンコに出すぞ!!  
よそ者のザーメン全部飲み!!」  
「んぶうっ!? んぢゅっ♡  
ぢゅっ♡ぢゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
ゴクッゴクッ……♡♡」



(うそ……まだやるの!?)



「けほっけほっ! うえ……っ」  
(口の中……喉奥も……ドロドロの精液のニオイでいっぱい……!?)  
「全部は飲み切れなかったか  
まあ仕方ない  
吐き出したぶんは  
マンコを使わせてもらおう」

「そ、そこだけは、  
勘弁して下さい……！  
せめて手や口だけで……！」

「あ？回答えすんなよ  
時貞は死んだし  
旦那も大して  
使ってねえだろうし  
ご無沙汰だろ？」



「俺のチンポはデカすぎて  
入らない女もいるからな  
多少使用済みの  
経産婦人妻マンコの方が  
かえって丁度いいんだ」

「お尻の穴……♡  
そんなの  
変態じゃない……♡」

「そういえば……  
時貞はアナルはあまり  
使ってなかっただろ？」

「マンコの後には  
アナルも  
犯してやるからな」



「おおっ、肉便器の  
人妻マンコの割には  
締まりがいいじゃねえか！  
しつかり巨根チンポに  
膣肉がまとわりついて  
精液搾り取るうと  
してるぜ？」

「お父様が亡くなつて…  
もう身体を捧げることなんて  
ないと思つていたのに…  
こんないよそ者の男根に  
膣内ナカを弄もてあそばれるなんて…」

「せ、せめて  
外に出して下さうっ  
膣内はダメ……っ」

「ぞっ♡んなこっつ  
ないっ……んああっ♡  
イヤですっ♡♡」

「は？  
マンコに出すに  
決まってるだろ  
ガキ孕ませてやるわ」

「いやあああああ  
他所の男の精液でっ  
孕みたくないっつっ!!  
やめてっやめてえっ!!!」

「オラッ!」一番奥に!  
子宮に出すぞ!  
孕んでも知らねーよ!」



「うっ……♡  
はあ……はあ……ああ♡」

「ふう~~~~~  
あまりにエロくよがるから  
つい大量射精しちゃったわ  
わりいわりい」

「ひ……ひ……あ……  
あ……う……♡」

「もう終わりに  
して下さい……  
誰にも  
言いませんから……」



「いやあ 精液垂れ流しの  
人妻マンコ見てたら  
勃起おさままんねーよ！  
次は孕まないように  
アナル使うからな！」

（ひい……！もう嫌っ！！  
一体いつまで続くの……!?!）



「ねえ、  
誰か返事して？  
漏れちゃうよお」



「誰か入ってるの？  
僕、おしっこしたいんだけど…」

時弥…っ!?  
どうして  
こんな時に……



(ほらっ  
振り向いてやるから  
何か喋って追い払えっ)



(どうしよう……  
早く立ち去って  
くれないかしら……)

「だ、ダメ…っ♡  
オマンコから精液垂れ流してっ♡  
アナルにピストンされながらっ♡  
息子と喋るなんて…っ♡」

「シツ…♡  
ンダツ♡ふっ♡うっ♡  
ンシツ♡……っ♡♡♡」

「絶対…っ♡  
スケベな声  
出ちやう…っ♡」

「母親の下品な  
不倫セックス♡  
バレちやう…っ♡」

「あれ？  
母様の声が  
聞こえた気が…」



「オイオイこの女、  
感じすぎて  
頭が真っ白に  
なっているのか？  
チツ仕方ねえな…」

「時弥くん、  
こっちの便所は  
調子が悪いみたいなんだ  
いまおじさんが直してるから  
反対側のもう一つの厠を  
使ってくれるかい？」

ズッパッパッパッ  
ズッパッパッパッ

ズッパッパッパッ  
ズッパッパッパッ

「あれ？  
お客さんのおじさん？  
そうなんだ……」

「分かった！  
向こうを使うね  
どうもありがとう！」

「すまないねえ  
……フンッ！  
フッ！フッ！」



「あの子供、  
いなくなつたみたいだな」

「俺のおかげで、子供に  
お前が他人のチンポに  
よがる姿を見せずに  
済んだんだからな？  
ケツ穴でチンポしごけよ」

「あっ♡オシ♡オオシ♡  
イッ♡お尻の穴で♡  
イッ♡ちぢぢ♡  
やめ♡下っ♡あああああ♡」

「もう…普通の  
セックスには  
戻れない…♡」

ビクッ

「はあ…はあ…っ  
あっ…♡ああ…♡」

ハッ  
ハッ

「これでアナルも  
チンポケースとして  
開発完了っ」と

「この漏れたザーメン  
もうマンコのやつか  
アナルのやつか  
分かんねえな」

「も…もう……  
無理……♡」

ドボ

ドボ

「あーまた淫乱人妻マンコに  
入れたくなっちゃまったから  
キンタマ枯れるまで  
マンコとアナル交互に  
ハメてやるわ」

「あああ…♡ダメえ……♡  
もう…イキすぎて…♡  
ゆ…ゆるしてる……♡」

IP

IP

ビクッ



「ふうー...  
エロ女過ぎて  
つい夜明けまで  
ヤツちまった」

「旦那が帰る前に  
終わりにするか  
...ん？」

グワッ  
グワッ

チュン  
チュン...



「うおっ!  
アナルとマンコから  
精液垂れ流しながら  
小便かよ! ギャハハハ!  
真正正銘の便器女だな  
それでも良家の娘か!」

後日――

「おお、庚子さんか  
私なんか一体  
何の用かね？」

「先日いらしたお客様、  
ハンカチを  
お忘れになったのです」

「ハンカチ？  
そんなもの黙って  
捨ててしまえば  
良いではないか」

「いえ  
大切な物かも  
しれませんので」

どうしても

ご連絡を  
差し上げたくて

■奥付

誌名：愛し恋人のいない夜

発行日：2023.12.30

発行者：ハンガー反射／温泉川よそ見

連絡先：hanger\_reflection@yahoo.co.jp

twitter：@yunokawa\_yosomi pixiv:187153

印刷所：金沢印刷様

お手に取って頂きありがとうございました！

ハンガー反射